

# 自分の考えを伝え合い、読みを深める国語科学習指導

～ 物語教材における対話活動と振り返りの工夫を通して ～

所属機関 飯塚市教育研究所  
所属校 飯塚市立片島小学校  
職・氏名 教諭 石川 和佳

## 1 主題設定の理由

### (1) 社会の要請から

国語科の学習を通して、どの領域においても自分の思いや考えを持って発信することが重要であり、「読むこと」の領域でもより一層の思いや考えの深まりが求められている。特に、物語教材において考えを共有し、一人一人の感じ方などには違いがあること気付くことは、自分の考えを広げ深めるとともに言語を通じてお互いの考えを尊重する態度を養うことも大切であると考え。

### (2) 児童の実態から

アンケートの結果から、自分の考えを伝えることが苦手と答えた子どもの割合が全体の30%であった。自分の考えを伝えることが苦手な理由としては、「自分の考えに自信がない」と回答した子どもが多く、考えを伝え合うことで、自分の考えに自信を持てたり、自分の考えをつくるヒントにしたりという経験が乏しいことが分かる。

### (3) これまでの指導の反省から

これまでの国語科「読むこと(物語教材)」の学習を振り返ると、場面ごとに登場人物の気持ちを想像したり、叙述を理解したりする学習に留まり、受け身的な読みにしてしまっている現状がある。登場人物の気持ちの変化や性格、情景について場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像し、叙述をもとに自分の考えをつくることや、根拠と理由を明確に持った上で自分の考えをつくるという学習には至っていない。また、自分の考えを付け加えたり修正したり、自分の考えを強化するような対話活動を設定することができていないという反省がある。

## 2 主題の意味

### (1) 主題について

国語科「読むこと」における「自分の考え」とは、文章を読んで文章の構成や内容をとらえ、叙述から解釈したことを自分の知識や体験と結び付けて感じたり思ったり、考えたりしたことである。つまり、叙述からの理解に留まらず、一人一人の異なる知識や体験を結び付けることで形成される考えといえる。「自分の考えを伝え合う」とは、自分の考えを理由や根拠を示しながら伝えたり、他者の考えを聴き合ったりすることである。

「読みを深める」とは、子どもたちそれぞれの考えについて伝え合うことで、自分と異なる知識や体験から形成された他者の考えを取り入れながら、自分の考えに他者の考えを付け加えたり、修正したり、自分の考えを強化したりして、自分のこととして能動的に読みを深めていくことである。

### (2) 副主題の意味

「対話活動」とは、自分の考えを仲間の考えをお互いに聴き合いながら新たな考えをつくったり、自分の考えを強化したりすることである。「振り返り」とは、単元や一単位時間の終末部において、獲得した国語の能力を自覚したり共有したりする手立てを講じることである。振り返りを行うことで、児童が学習前後の読みの変容や読み方を自覚し、自分の考えの深化・拡充を整理し、学びを積み上げていくために重要である。

### 3 研究の目標

#### (1) 研究の目標

第4学年国語科学習において、子どもたちが自分の考えを伝え合い、読みを深めることができるようになるために、物語教材における対話活動と振り返りの工夫が有効であるかを明らかにする。

#### (2) 本研究で目指す子どもの姿

- ① 振り返りを通して、登場人物の行動や気持ちなどについて、叙述を基に捉えて考えることができる子ども
- ② 登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像し、自分の考えをつくることができる子ども
- ③ 対話活動を通して、自分の読みを見直し、自分の考えを付加・修正・強化することができる子ども
- ④ 学習の振り返りを行い、自分の読みの深まりに気付く子ども
- ⑤ 文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人ひとりの考えを尊重することができる子ども

### 4 研究の仮説

第4学年国語科(物語教材)において、以下のような手立てをとれば、考えを伝え合い、読みを深める子どもを育てることができるであろう。

【着眼1】 自分と友達の見方の違いに気づき自分の考えを付加・修正・強化できるような対話活動を位置づける。

【着眼2】 自分の考えの根拠や変容を振り返り、単元を通して読みの深まりを自覚できるワークシートを工夫する。

### 5 研究の実際

#### (1) 検証授業1 (9/10)

単元名	人物の変化をとらえよう	教材名	「走れ」	東京書籍	新しい国語	4年上
-----	-------------	-----	------	------	-------	-----

#### ア 実践のねらい

中心人物の気持ちが最も大きく変化した部分について、叙述を基に捉え中心人物の変化について他者の考えを取り入れながら、読みを深めることができるようにする。

#### イ 授業の実際

##### 【着眼1 対話活動の工夫】

「中心人物のぶよの気持ちが大きく変化したところはどこか、また、のぶよはどのように変化したのか。」という学習課題を設定した。はじめは、あまり根拠はなく物語の叙述を選ぶ子、そう考えた根拠が持てない子などの児童がほとんどであった。そこで、お互いの考えを確認する目的でペアでの対話、叙述や自分の体験をもとにお互いの考えを伝え合うグループでの対話、考えの共通点や相違点を比較する全体交流の場を設定した。ペア・グループ・全体の三段階の対話活動を行ったことで検証児Mにとっては、はじめ自分の考えを直観で考えていたところから、迷いながらも最終的に自分の読みを決めることができていた。

【着眼2 振り返りの工夫】

自分の読みを振り返り、読みの深まりが自覚できるように、次のようなワークシートにした。(図1) 授業のはじめに直観的に感じたことや思ったことを記述させること、そのように考えた理由を気持ちが変化した前後の叙述をもとに考え記述させる場を設定し、直観で感じたことが何に基づいているのか表出させること、学習後に対話活動によって自分の考えがどう変わったかについて記述させ、自分の考えの変容や読みの深まりを自覚させることにした。

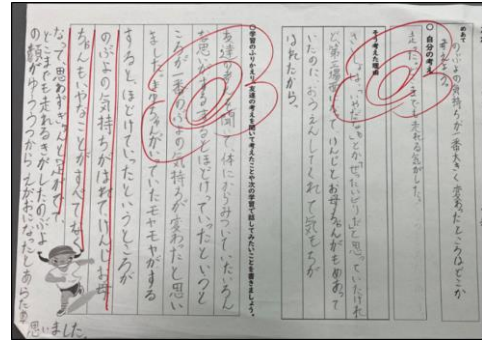


図1 M児ワークシート

M児の学習終わりでは、「からみついていった」という叙述から、「するするとほどけたのは、のぶよ、けんじ、お母ちゃんのいろんな思い」で「のぶよの気持ちがはれた」というところに自信を持って迷わずに書いていたのは、友達の考えを聞いたことで、自分の考えがさらに強化されたからだと考える。

ウ 考察(○成果●課題)

- ペア・グループ・全体での対話を行ったことで、直観的だった自分の考えが根拠に基づいた考えと変容した。
- 振り返りとワークシートの工夫で、一時間の子どもの考えの変容が自覚できた。
- 対話活動での話し合う視点が不明確だったため、同じことの繰り返しになった。
- 単元を通した考えの深まりの把握に至らなかった。

(2) 検証授業2 (9/11)

単元名 読んで考えたことを伝え合おう 教材名「ごんぎつね」東京書籍 小学校4年下

ア 実践のねらい

「最後の場面で二人の心は通じ合ったのか」を学習課題に設定し、これまでの学習を振り返りながら、複数の場面の叙述やごんと兵十それぞれの気持ちの変化をもとに、自分の考えを深めることができるようにする。

イ 授業の実践

実践1の課題から、実践2では

- ① ペア、グループ、全体での対話活動それぞれの話し合う視点を明確にすること。
- ② 毎時間の終末に“心の距離図”を用いて、ごんと兵十の心はどのくらい近づいているかを数値化すること。また、ロイロノートにより、心の距離図を毎時間蓄積し、考えの変容を自覚化させることを手立てとして授業実践を行った。

実践2では、単元全体を通して、中心人物の気持ちの変化や自分の考えを可視化できるようにするため、次のような“心の距離図”を使い実践を行った。学習ではロイロノートを使い、毎時間、学習の終わりに「ごんは兵十にどのくらい近づいているのだろうか？」という問いで、叙述をもとに0~10段階で「ごんと兵十の心の距離」として表現させ、自分の考えとその根拠となる叙述と理由を書かせた。(図2)

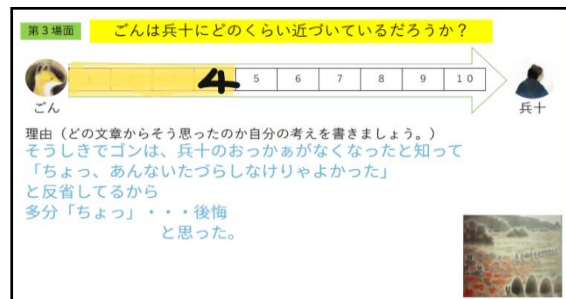


図2 A児ロイロノート(心の距離図)

【着眼1 対話活動の工夫】

まず、ペアでの対話活動では、対話の視点とそれぞれの考えを確認し、納得することとし、対話を開始した。この時にはお互い共感的に聴き合う姿が見られた。次にグループの対話では、二人の心の距離の根拠となる考えの違いに気付かせるようにした。このことでグループ対話では叙述に目を向け、考えを広げる姿が見られた。全体の交流では、

学習課題について改めて発問し、自分の考えの変化に目を向け伝え合いの場を設定した。視点を明確にした対話活動により伝え合うことが明確化し、考えの変容が見られた。

段階を踏んでいくように組んだことで、自分の考えと友達の考えを比べ、共通点や相違点を交流し、自分の読みに付加・修正・強化をする子どもの姿が見られた。また、自分の考えを共感してもらえたことで自分の考えに自信を持つことができていた。

### 【着眼2 振り返りの工夫 考察】

学習終末で、はじめの心の距離と最後の心の距離を比べ、その根拠を記述させる振り返りの場を設定した。さらに、単元の終末では、ロイロノートにより毎時間作成した心の距離図を振り返り、自分の考えの変化に着目させた。子どもたちは、「ごんから見たら兵十が気付いてくれてうれしかった気持ちがあったよね。兵十は複雑な気持ちだけれど、ごんを撃ってよかったといううれしさはないからごんの気持ちわかったんだと思うよ。」などの感想を語り、自分の考えが深まっていたことを自覚し、主体的に学習したことに自信と満足感を持つことができた。

A児は、対話活動を終えたあと、(図3)のように考えをまとめている。はじめに考えていた自分の考えから友達の意見も取り入れ、自分の意見を付加・強化していることが分かる。A児ははじめ「ごん、お前だったのか。」や「ぱたりと取り落としました。」に注目し、そこから兵十にはうれしさがなくごんへの感謝の気持ちがあったから通じ合い度は10ということにこだわっていた。しかし、A児は振り返りの中で「ごんがうなずいた。」という友達の意見を取り入れ、うなずいたということは通じ合ったと考え、自分の考えにも納得した形で振り返りを行うことができた。

はじめの考え	おわりの考え
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
※そう考えたいわけを書きましょう。また、どの文章からそう考えたのか教科書の文に線をひきましょう。	※そう考えたいわけを書きましょう。また、どの文章からそう考えたのか教科書の文に線をひきましょう。
兵十が「ごん、お前だったのか。」とびっくりした。兵十は複雑な気持ちだけれど、ごんを撃ってよかったといううれしさはないからごんの気持ちわかったんだと思うよ。	ごんは「ごん、お前だったのか。」とびっくりした。兵十は複雑な気持ちだけれど、ごんを撃ってよかったといううれしさはないからごんの気持ちわかったんだと思うよ。
ごんが「ごん、お前だったのか。」とびっくりした。兵十は複雑な気持ちだけれど、ごんを撃ってよかったといううれしさはないからごんの気持ちわかったんだと思うよ。	ごんが「ごん、お前だったのか。」とびっくりした。兵十は複雑な気持ちだけれど、ごんを撃ってよかったといううれしさはないからごんの気持ちわかったんだと思うよ。
ごんが「ごん、お前だったのか。」とびっくりした。兵十は複雑な気持ちだけれど、ごんを撃ってよかったといううれしさはないからごんの気持ちわかったんだと思うよ。	ごんが「ごん、お前だったのか。」とびっくりした。兵十は複雑な気持ちだけれど、ごんを撃ってよかったといううれしさはないからごんの気持ちわかったんだと思うよ。
ごんが「ごん、お前だったのか。」とびっくりした。兵十は複雑な気持ちだけれど、ごんを撃ってよかったといううれしさはないからごんの気持ちわかったんだと思うよ。	ごんが「ごん、お前だったのか。」とびっくりした。兵十は複雑な気持ちだけれど、ごんを撃ってよかったといううれしさはないからごんの気持ちわかったんだと思うよ。
ごんが「ごん、お前だったのか。」とびっくりした。兵十は複雑な気持ちだけれど、ごんを撃ってよかったといううれしさはないからごんの気持ちわかったんだと思うよ。	ごんが「ごん、お前だったのか。」とびっくりした。兵十は複雑な気持ちだけれど、ごんを撃ってよかったといううれしさはないからごんの気持ちわかったんだと思うよ。
ごんが「ごん、お前だったのか。」とびっくりした。兵十は複雑な気持ちだけれど、ごんを撃ってよかったといううれしさはないからごんの気持ちわかったんだと思うよ。	ごんが「ごん、お前だったのか。」とびっくりした。兵十は複雑な気持ちだけれど、ごんを撃ってよかったといううれしさはないからごんの気持ちわかったんだと思うよ。
ごんが「ごん、お前だったのか。」とびっくりした。兵十は複雑な気持ちだけれど、ごんを撃ってよかったといううれしさはないからごんの気持ちわかったんだと思うよ。	ごんが「ごん、お前だったのか。」とびっくりした。兵十は複雑な気持ちだけれど、ごんを撃ってよかったといううれしさはないからごんの気持ちわかったんだと思うよ。
ごんが「ごん、お前だったのか。」とびっくりした。兵十は複雑な気持ちだけれど、ごんを撃ってよかったといううれしさはないからごんの気持ちわかったんだと思うよ。	ごんが「ごん、お前だったのか。」とびっくりした。兵十は複雑な気持ちだけれど、ごんを撃ってよかったといううれしさはないからごんの気持ちわかったんだと思うよ。

図3 A児ワークシート

## 6 成果と課題

### (1) 本研究で得られた成果

- 対話活動をペア→グループ→全体へと段階を踏んだことで、自分の考えに自信を持ち、伝えることができた。また、友達の考えを比較しながら聴き合うことで、自分の考えを改めて見直し、付加・修正・強化をし、読みを深めることができた。
- ロイロノートを使い、心の距離図を毎時間蓄積したことで、人物の変化や人物同士の関わりをとらえることができた。場面ごとの心情を可視化(心の距離図)することで登場人物の心情の変化が見えやすく、国語科の読みが苦手な子にとっても変化が見えやすく有効だった。

### (2) 課題

- 対話を充実させるために、話し合いの段階を踏むことを手立てとして組んできたが、友達の考えを聴くにとどまってしまふことが多かった。子どもの実態の把握や単元設定が甘かった。読みの深まりの定義の明確化、子どもの思考の流れに沿って、必然的に対話をしたくなるような問いの設定や対話の時に伝えるのではなく考えを見せ、相手から質問できるような場を設定するなどの工夫が必要である。
- 心の距離図の数値化によって、読むことを苦手とする子どもにとっても叙述を意識しようとする姿は見られた。しかし一方で、数字にこだわって、考えの根拠となる叙述をもとにするのではなく、「なんとなくそう思った。」という子どもの姿も見られた。子どもの実態を細かく把握し、数値を減らすなどの心の距離図の改善やワークシートの工夫が必要である。

#### <参考文献>

- ・文部科学省 『主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善の視点について』
- ・二瓶弘行 『二瓶弘行の「物語 授業づくり 入門編」』文溪堂
- ・石井順二 『続「対話的学び」をつくる聴き合いとICTの往還が生む豊かな授業』
- ・石井順二 『子どもの読みがつくる文学の授業』